

筑波大学大学院生の運動能力に関する一考察 —— 一般事務職員との比較 ——

中谷 敏昭・斉藤 武利・嵯峨 寿

Comparison of physical performance between clerical workers
and postgraduate students in University of Tsukuba

Toshiaki NAKATANI, Taketoshi SAITO, Hitoshi SAGA

Abstract

Nowadays, as higher education is getting more popular in Japan, a lot of undergraduate students are beginning to enter a school of higher grade than before. The physical education, which is a compulsory subject for undergraduate students has not been giving postgraduate students opportunities to participate in some of the classes.

Many reports suggest that the physical performances of undergraduate students has been declining, but there are no reports for the postgraduate students' performances. In this report, the performances of postgraduate students are investigated, to show the necessity and to compel them to take part in sports activities. The data were from the results of physical performance tests which took place in University of Tsukuba for the past 5 years. Especially, we have selected three items (grasping power, trunk forward flexion, vertical jump), to be compared with the clerical workers' performances.

In the recent 5 years, the average result of all the tests by male students have shown to be lower than of the clerical workers'. On the other hand, the average results of trunk forward flexion and vertical jump by female students were lower than those done by the clerical workers except for their results is grasping power which was superior to the clerical workers' results.

We will presume the exercise frequency of postgraduate students from the relation between physical performances and exercise frequency of clerical workers. As a result, the average of grasping power of male students is nearly the same to those by a clerical worker who participates in some sport activity once a week. However, the average of trunk forward flexion and vertical jump by male students are nearly the same to those by clerical workers who do not do any sport activities. On the other hand, the average of grasping power by female students are nearly the same as those who participate in some sport activity once a week. However, the average of trunk forward flexion and vertical jump are nearly the same as those by clerical workers who do not do any sport activity. It was found that the exercise frequency of postgraduate students has not been sufficient.

As a whole, it has been said that the physical performances of postgraduate students are inferior to that of a clerical worker's. It is also shown that their physical

performances are either almost the same with those by clerical workers who do not do any sport activity, or somewhat less. It is reasonable for us to propose that postgraduate students should have opportunities to participate in some sport activity at least once a week, for it can stop the decline of their physical performances which begins in their ages; 25–29 years old.

Key word: physical performance, postgraduate student, clerical worker

I. 緒言

1. 研究の背景

我が国における高等教育の大衆化は目ざましく、最近では大学院への進学率が高まってきた（註1）。多くの大学で、学部学生（undergraduate student）は体育を必修科目ないし選択科目として受講している。一方、大学院学生（postgraduate student；以下「大学院生」）に対しては体育を受講する機会は制度的に用意されていない。これは筑波大学はじめほとんどの大学の現状である。

近年、大学の教育改革に関する議論が内外で沸き起こっており、一般教養縮小の中で大学の一般体育関係者に厳しい課題として受け止められている。平成2年7月末に大学審議会が出した「審議の経過の概要」では、大学設置基準の簡素化・大綱化と大学の自主的なカリキュラム編成、および大学の自己評価システムの確立が、大学における教育の改革に関する方針の大きな特徴としてうたわれており³⁾、これらが実現されれば、大学の自主的な判断と選択によって一般体育の必修制廃止や選択制への移行が実現可能となるためである。

こうした大学教育の改革・改善動向に対する大学の一般体育関係者の対応は、主に、国立大学協会の改革方針を典型とした「健康科学教育」を前面に立てた生き残り、とりわけ必修確保のための論理であった⁵⁾。

筑波大学の一般体育を担っている「体育センター」は、こうした大学体育を取り巻く環

境状況を視野に入れ、現代社会を「人生80年時代」「レジャー時代」「生涯学習時代」「生涯スポーツ時代」といったキーワードで認識し、自らを「生涯スポーツのための教育と研究の機関」（註2）として革新・改善を図る方針を打ち出し、現在その具体策を検討している。

さて、昭和60年に筑波大学大学院生を対象に実施された運動生活調査によれば、3人に1人は「日常ほとんど運動をしていない」という結果が報告されている¹⁾。運動生活がこうした現状にあるのに対し、運動欲求のレベルは極めて高く、9割近くの者が「生活の中で、定期的な運動を必要」と答え、7割が「運動することが好き」と答えている。また、「大学院に体育の授業があれば受講したい」と答えた者は5割に達する。こうした大学院生の欲求をみれば、何らかの形で彼らにそのための機会を制度的に提供する配慮が講じられるべきかも知れない。大学院進学率が増加傾向にある社会的動向においては、学部（学群）から大学院への一貫した体育の必要性が真剣に検討されるべきと思われる。また、それを契機に大学の一般体育は、この課題解決に伴う努力に今後のひとつの方向性を見いだせることにも留意すべきと思われる。

平成2年10月10日「体育の日」、この日の主要新聞4紙（註4）は、文部省が平成元年に実施した「体力・運動能力調査」の概要を報道しており、その中で成人の敏捷性が高まってきていることを強調している。成人の体力・運動能力の高まりは、近年の自由時間

の増大や健康志向などを背景としたフィットネスブームが関係している。また、ここ数年職場の福利厚生担当部署では“Good Health is Good Business”をかけ声に、従業員の体力・健康管理に力を注いできている。

さて、先の大学院生の運動生活調査では、全体の9割が「運動不足の解消」「気分転換」を運動の目的として挙げており、「身体や心の健康に役立つもの」として運動を捉えている¹⁾ことがわかる。彼らにとっては、“Good Health is Good Study”ということであろう。

2. 研究の主題

大学院生に対して運動の機会を制度的に提供する必要性を検討するため、本研究ではその必要性が大学院生の体力・運動能力の現状からみた場合に、どう判断されるべきかを明示する。

3. 本研究の位置付け

大学院生に対する運動の機会を提供する必要性を検討するには、体力や運動能力を中心とした健康科学教育の観点からの分析・考察だけでは確かに不十分である。それだけが根拠にされるならば何も大学体育でなくとも、舛本⁶⁾も言うように「地域社会における生涯スポーツ活動の一環に組み込む」ので十分であろうし、「スポーツ経験主義では課外スポーツにとって代わられ」ても仕方ないと思われる。従って、機会提供の必要性とその主張は、理念的には「健康・体力・スポーツ技能・スポーツ経験などを取り込んだ形で『教養としての体育』」という形で、いわば多面的視点からの研究成果をもって初めて根拠づけられるべきかも知れない。さらに、現実的な問題としては大学の施設やスタッフなどの諸資源についての検討を併せて最終的に判断されるべきである。従って、政策的意図を含む本研究では、こうした研究上の限界を十分自覚しながらも、大学院生の体力・運動能力の調査

結果を資料に、運動の機会の制度的提供が必要かどうかの判断を下すことにする。

II. 研究の方法

1. 本研究における分析手順

筑波大学では、開学当初年度から全学学群生を対象に、形態測定、運動能力テストを実施してきた。さらに、昭和60年からは大学院生に対しても同種の調査を継続的に実施してきている。大学院生に関するこうした調査は他大学ではほとんど例がみられず、その意味で調査自体先駆的であるといえる。

そこでまず本研究では、これまで蓄積されたデータを活用し、筑波大学大学院生の体力・運動能力が高いのか、低いのか、その現状を把握することを第一にした。運動能力の高低を判断するひとつの基準として選んだのは、文部省が毎年行っている体力・運動能力テストにおける同年代層の測定値である。しかしながら、同年代層といっても職種による体力・運動能力差が著しいことから、大学院生と比較的近似な生活環境にあると思われる「一般事務職員」の運動能力値を高低判断の基準に用いた。さらに、大学院生の運動能力がどの程度(頻度)運動を行なっている人の値に近似的かを知るために、大学院生の体力・運動能力値と文部省の運動能力テストにおける全参加者の頻度別にみた体力・運動能力値とを比較し、推定を試みた。

2. 測定調査項目の概要と統計解析について

筑波大学では「形態」と「運動能力」について測定を行っている。「形態」としては、身長、体重、上腕囲、大腿囲、肺活量、皮下脂肪厚(上腕背部・肩甲骨下部)、血圧の7項目、「運動能力」としては、握力、垂直跳、体前屈、反復横跳の4項目を測定対象にしている。なお、運動能力の測定方法は、文部省

の運動能力テストの実施要項にならっている^{2,4,9)}。

本研究でのデータの集計および統計処理には、筑波大学学術情報処理センターのFACOM M780/20を用い、また、平均値の差を検定するにあたっては、T-testおよび一元配置の分散分析法を用いた（有意水準は $p < 0.05$ ）。

3. 用語の説明および方法上の限界

本学大学院生の体力・運動能力の測定項目は上記のように合計11項目あるが、本研究では専ら運動能力の3項目、すなわち「握力」「垂直跳」「体前屈」に限定しており、形態は分析・考察対象から除外している。従って、今後本稿において「運動能力」という場合には、これらの項目を指す総称として用いられるが、もちろん運動能力はこれらの三指標だけで語り尽くせるものでないことに注意しなくてはならない。しかし、筑波大学で行われている測定項目が少数で、なおかつ文部省の測定項目と同じ項目が少ないという事情があるため、それも仕方ないと思われる。

本文中に用いた「全国平均値」とは、一般

事務職員の平均値を指す。

Ⅲ. 結果と考察

1. 最近5ヶ年の筑波大学大学院生の運動能力について

(1) 男子大学院生

1) 握力

図-1は、最近5ヶ年の男子大学院生の握力の経年変化を各年齢ごとにみたものである。大学院生の握力は、全国平均値よりもはるかに劣っている。しかし、昭和60、61年にみられた大学院生と全国平均値との差は近年縮まる傾向にある。握力は20歳代に最大になり、20歳代はこのレベルを維持することが指摘されている^{7,8)}。この傾向は28歳の大学院生が昭和63年から平成元年に大きく低下していることを除けば、ほとんどの年齢で認められることである。

2) 垂直跳

図-2は、最近5ヶ年の垂直跳の経年変化を各年齢ごとにみたものである。垂直跳は10歳代後期まで急激に発達し、最高レベルに達してからは5~10年間そのレベルが維持さ

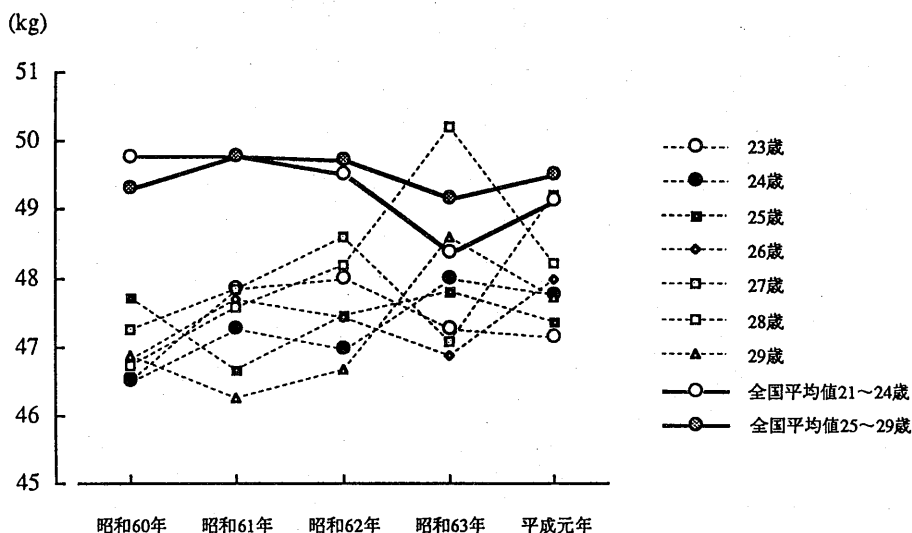


図-1 男子大学院生の運動能力（握力）

れ⁷⁾、以後は次第に低下傾向に移る。図をみると、男子大学院生の23歳と24歳の値は全国平均値とそれほど大差はない。しかしながら、年齢が高い者(28, 29歳)の値は、ここ5年間とも全国平均値をかなり下回っている。

3) 体前屈

図-3は、最近5ヶ年の体前屈の経年変化を各年齢ごとにみたものである。全国平均値

(21~24歳群, 25~29歳群)は、ここ4年間低下傾向にあることがわかる。一方、大学院生についてみると、23歳と24歳の値はここ数年大きな変動はみられないが、他の年齢では変動の幅が大きく、どの年齢の大学院生も全国平均値に比べ低レベルにある。特に、25歳と29歳の値は昭和63年から平成元年にかけて大きく低下している。

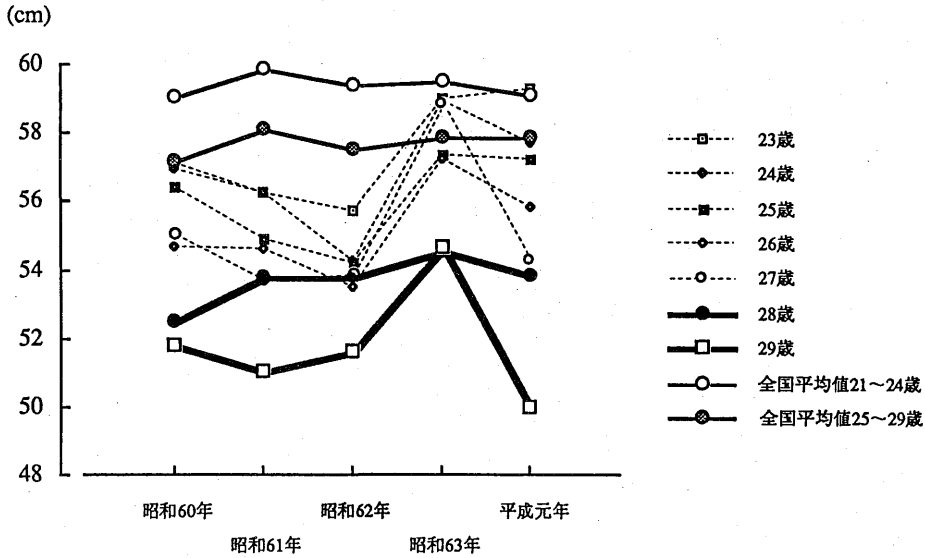


図-2 男子大学院生の運動能力(垂直跳)

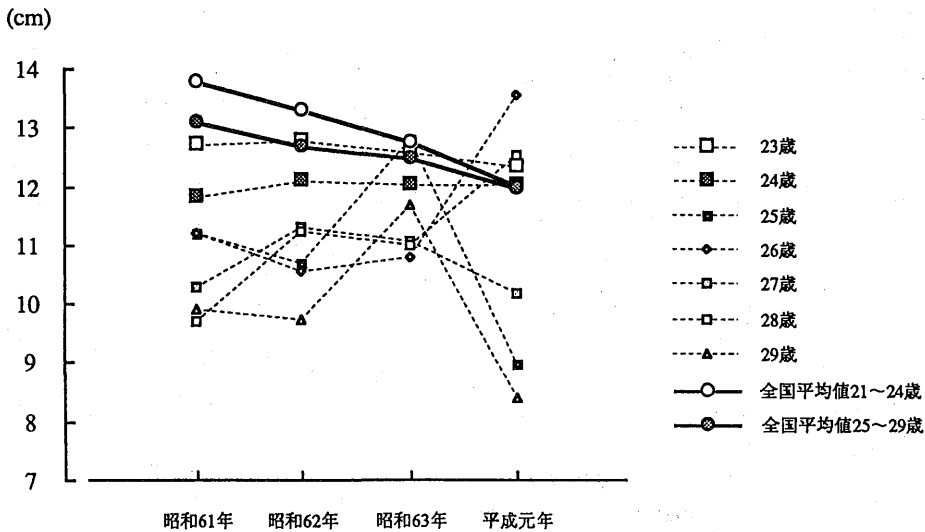


図-3 男子大学院生の運動能力(体前屈)

(2) 女子大学院生

1) 握力

図-4は、最近5ヶ年の女子大学院生の握力の経年変化を各年齢ごとにみたものである。全国平均値(21~24歳群, 25~29歳群)はともに、ここ数年変化はみられない。さらに、両群の値にはほとんど差はみられない。一方、大学院生についてみると、29歳を除いて、他の年齢は昭和63年の値が全国平均値を大きく上回っている。概して大学院生は、全国平均値よりも高いレベルにあると思われる。

2) 垂直跳

図-5は、最近5ヶ年の女子大学院生の握力の経年変化を各年齢ごとにみたものである。全国平均値の21~24歳群, 25~29歳群はともにほぼ横ばい傾向で、経年格差はみられない。また、両群の値を比較してみると、21~24歳群の値が25~29歳群の値を上回っている。大学院生についてみると、どの年齢の値も全国平均値よりも低いか、同じくらいにある。大学院生の値は昭和60~62年には全国平均値との差が大きかったが、昭和63年以降そ

の差は縮まる傾向にあることがわかる。

3) 体前屈

図-6は、最近5ヶ年の女子大学院生の体前屈の経年変化を各年齢ごとにみたものである。全国平均値は21~24歳群, 25~29歳群共にほぼ同じ値を示し、加えて経年格差はない。それに比べて、大学院生の27歳と28歳は年々低下傾向を示しており、全国平均値との格差が大きくなっている。他の年齢(29歳を除く)は、全国平均値とほぼ同じレベルにあることがわかる。

2. 筑波大学大学院生の運動能力の現状

(1) 平成2年の大学院生の運動能力について

表-1と表-2は、平成2年度に測定された筑波大学大学院生の運動能力を男子と女子についてそれぞれ示したものである。表-1の男子大学院生の場合についてみると、握力は、21~24歳群と25~29歳群がほぼ同じ値を示し、30~34歳群の者はそれより高い値を示している。この結果は20歳代は最大のレベルを維持し、30歳代に入ると低下が始まる⁷⁾と

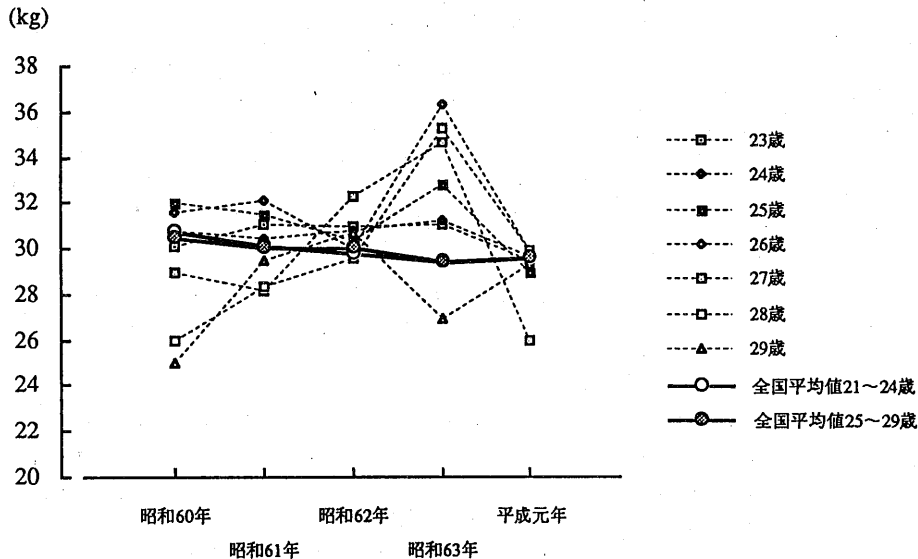


図-4 女子大学院生の運動能力(握力)

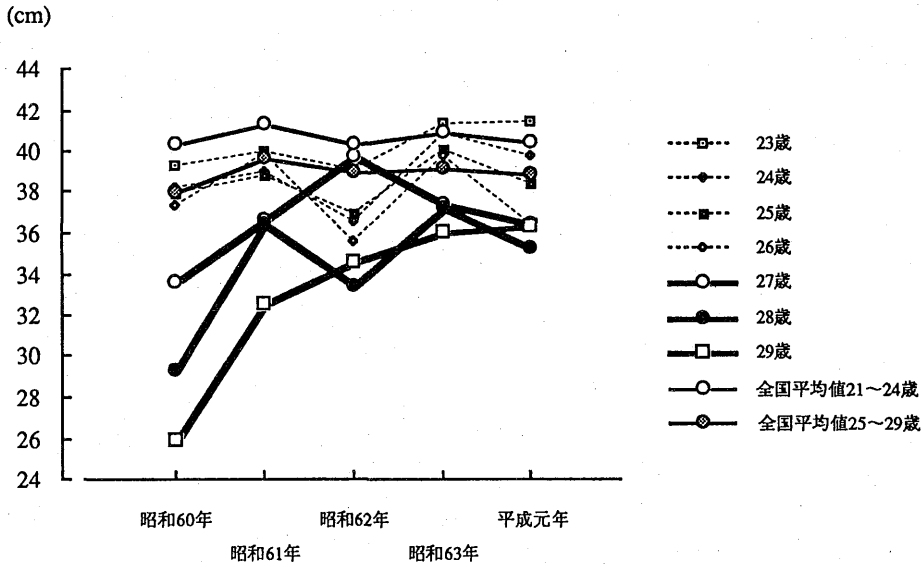


図-5 女子大学院生の運動能力（垂直跳）

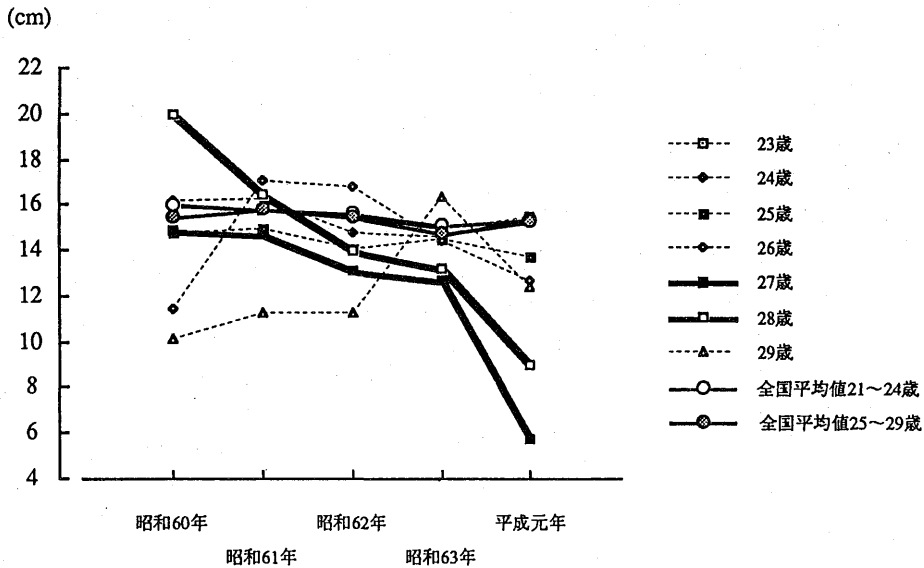


図-6 女子大学院生の運動能力（体前屈）

いう報告に全く反している。柔軟性（体前屈）については、30歳代から40歳代にかけて急速に低下するという報告⁷⁾に反し、大学院生の体前屈の値はどの年齢群もほぼ同様の値を示している。垂直跳と反復横跳の値は、年齢が高くなるにつれて有意に低下していることが

伺える。瞬発力（垂直跳）は10歳代後期に最大に達し、20歳代に入ると徐々に低下が始まるという報告⁷⁾に本調査の結果は一致している。しかし、敏捷性（反復横跳）は20歳代前半から低下がみられ、これは20歳代後期まで低下は始まらないとする報告⁷⁾に反する結果

表-1 筑波大学男子大学院生の運動能力

	n	握力 (kg)	n	体前屈 (cm)	n	垂直跳 (cm)	n	反復横跳 (回)
21~24歳	453	49.1±9.88	433	10.8±6.09	439	57.5±7.30	432	47.5±5.22
25~29歳	333	49.7±13.22	303	10.3±6.32	314	55.1±7.97	302	45.2±6.73
30~34歳	80	56.4±18.42	65	10.8±5.49	69	52.7±7.03	67	40.2±8.75
全体	866	50.0±12.35	801	10.6±6.13	822	56.2±7.69	801	46.0±6.51

Values are mean±SD

Statistical significance * = P<0.05, *** = P<0.001

平成2年4月測定

表-2 筑波大学女子大学院生の運動能力

	n	握力 (kg)	n	体前屈 (cm)	n	垂直跳 (cm)	n	反復横跳 (回)
21~24歳	142	34.7±15.74	134	14.9±6.22	133	39.4±6.20	127	40.2±4.65
25~29歳	95	38.8±23.69	83	13.9±6.66	83	35.6±6.79	80	36.7±7.28
30~34歳	27	36.2±19.33	23	13.9±7.90	24	34.2±6.86	23	36.7±7.22
全体	264	36.4±19.34	240	14.5±6.54	240	37.6±6.48	230	38.7±6.81

Values are mean±SD

Statistical significance * = P<0.05, *** = P<0.001

平成2年4月測定

を示した。

一方、女子大学院生の運動能力について示した表-2をみると、女子の握力は10歳代後期から30歳代中期にかけて最大レベルを維持するという報告⁷⁾と同様な結果を示した。柔軟性は10歳代後期から20歳代前期にかけて最大レベルに達し、30歳代に入ってから低下が始まるという報告⁷⁾があるが、大学院生の体前屈の場合、25~29歳群と30~34歳群の間には未だ有意な差は認められない。垂直跳や反復横跳は10歳代後期にほぼ最大レベルに達し、それ以後低下を示す^{7,8)}と報告されているが、このどちらの項目とも21~24歳群と25~29歳群の間で有意な差を示している。つまり、20歳代前半から能力の低下がみられるということである。

(2) 大学院生と一般事務職員の運動能力の比較

大学院生の運動能力の現状を把握するために、これまでに得られた知見と対比した時の特徴をみてきた。次に、大学院生と一般事務職員(註5)の測定値との比較検討を行なう。特に、特徴のある項目を図に示した。図-7

は男子大学院生と一般事務職員の体前屈の値の比較を、図-8は同じく垂直跳の値の比較を示した。体前屈は21~24歳群と25~29歳群のどちらの年齢群とも大学院生の値は一般事務職員よりも劣っており、柔軟性の低さが指摘できる。同様に、垂直跳についてもどの年齢群とも大学院生の値は一般事務職員よりも低い値を示し、瞬発筋力の低さが指摘できる。

一方、女子大学院生においては、表-2と表-4を見比べてみて分かるとおり、体前屈や垂直跳では大学院生と一般事務職員の間ほとんど差はみられなかった。それに対して、図-9に示したとおり、握力についてはどの年齢層においても大学院生の方が一般事務職員の値を大きく上回っている。

3. 運動能力と運動頻度との関係から推定した大学院生の運動実施状況

大学院生の運動能力がどれぐらいの頻度で運動を行っている者たちの運動能力に近いかを推定してみたい。大学院生と比較対象に用いたデータは、文部省の運動能力テストに参加した者全員の平均値(註6)である。彼らの運動能力を運動の頻度との関係で示したの

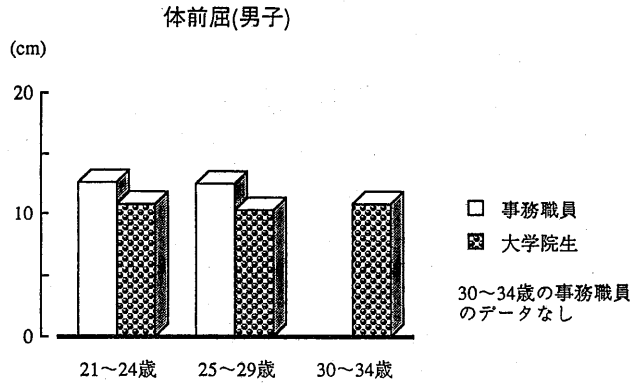


図-7 大学院生と一般事務職員の体前屈の比較

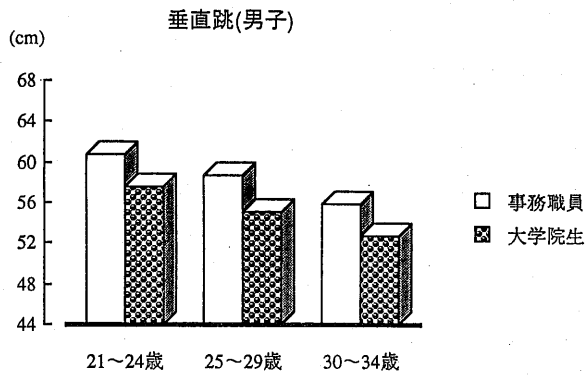


図-8 大学院生と一般事務職員の垂直跳の比較

表-3 一般事務職員男子の運動能力

	握力(kg)	体前屈(cm)	垂直跳(cm)	反復横跳(回)
21~24歳	49.5±7.05	12.7±6.04	60.7±8.57	46.5±5.44
25~29歳	49.1±6.80	12.5±6.03	58.7±8.57	45.8±5.48
30~34歳	50.4±6.52		55.9±7.65	47.4±6.00

Values are mean±SD

昭和63年度体力・運動能力調査報告書(文部省刊)より作成

表-4 一般事務職員女子の運動能力

	握力(kg)	体前屈(cm)	垂直跳(cm)	反復横跳(回)
21~24歳	29.3±5.15	16.3±5.18	41.4±5.98	39.4±4.77
25~29歳	30.2±4.96	15.9±5.28	39.6±6.83	38.4±5.01
30~34歳	30.4±4.34		37.2±6.19	40.4±5.74

Values are mean±SD

昭和63年度体力・運動能力調査報告書(文部省刊)より作成

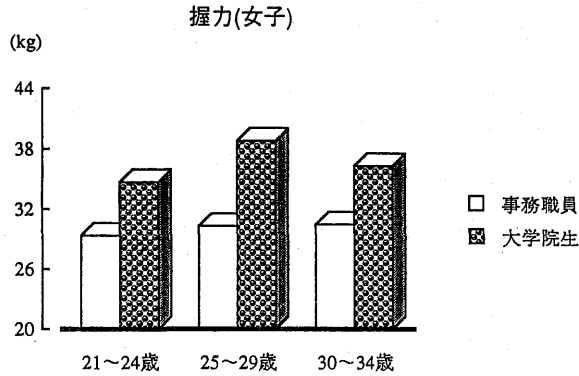


図-9 大学院生と一般事務職員の握力の比較

表-5 運動実施状況別テスト (男子)

21~24歳

	握力(kg)	体前屈(cm)	垂直跳(cm)	反復横跳(回)
ほとんど毎日	50.2±6.96	13.3±5.99	61.4±8.08	46.8±5.04
ときどき	50.0±7.00	12.8±5.81	60.0±8.16	45.9±4.98
ときたま	48.5±7.14	11.7±5.49	58.0±8.16	45.0±5.30
しない	47.0±7.39	11.5±5.61	55.6±8.51	42.9±5.64

25~29歳

	握力(kg)	体前屈(cm)	垂直跳(cm)	反復横跳(回)
ほとんど毎日	51.1±7.51	13.7±5.75	61.1±8.68	47.4±5.27
ときどき	49.6±6.74	12.6±5.46	58.8±8.19	45.4±5.26
ときたま	49.1±6.78	11.5±5.65	56.2±7.92	44.1±5.23
しない	49.0±7.18	10.8±6.26	55.5±8.95	43.4±5.68

Values are mean±SD

昭和63年度体力・運動能力調査報告書(文部省刊)より作成

ほとんど毎日;週3~4日以上の頻度で運動を実施

ときどき;週1~2回程度の頻度で運動を実施

ときたま;月1~2回程度の頻度で運動を実施

しない;ほとんど運動をしない

が表-5である。これと男子大学院生の運動能力を示した表-1とを比較した。同じく女子についても、表-6と表-2との照合を行った。

男子および女子の運動頻度別体力測定値をそれぞれ示した表-5と表-6からも明らかのように、例外(註7)はあるものの運動の

頻度が多くなればなるほど、握力、体前屈、垂直跳の能力は高くなっていることがわかる。

21~24歳群および25~29歳群の運動実施状況別の体力測定値と大学院生の結果を分かりやすく表-7に示した。まず、21~24歳群の男子大学院生についてみると、握力が「とき

たま」と「ときどき」の中間位で「ときたま」に近く、体前屈は「しない」の値よりさらに低い水準、垂直跳は「ときたま」の数値に近似している。このことから、21～24歳群の大学院生の運動頻度は、ほとんどしていないか、あるいは実施していたとしても「ときたま」（月1～2回）程度であることが予想できる。

次に、25～29歳群の男子大学院生の場合では、握力は「ときどき」に近く、体前屈は「しない」よりもかなり低い水準、垂直跳は「しない」にほぼ近い値を示している。この年齢群も、21～24歳群と同様に運動頻度が少ない

ことが推察される。

一方、男子と同様に女子について比較照合した結果を表-8に示した。21～24歳群の女子大学院生の握力は、「ほとんど毎日」運動を実施している者の値を大きく上回る水準である。これに対し、体前屈や垂直跳は「ときたま」運動を実施している者に近い水準にあった。

25～29歳群の女子大学院生の場合、握力は「ほとんど毎日」運動をしている者の平均値を大きく上回る水準にあり、平均値との差は21～24歳群の値よりも顕著に大きかった。一

表-6 運動実施状況別テスト（女子）

21～24歳

	握力(kg)	体前屈(cm)	垂直跳(cm)	反復横跳(回)
ほとんど毎日	30.2±5.92	15.7±5.32	42.2±7.31	39.7±5.94
ときどき	30.5±4.79	16.3±4.96	41.6±6.52	39.5±4.76
ときたま	29.5±4.69	15.3±4.94	40.4±6.08	38.6±4.93
しない	28.5±5.41	14.0±5.88	38.2±6.03	37.2±5.33

25～29歳

	握力(kg)	体前屈(cm)	垂直跳(cm)	反復横跳(回)
ほとんど毎日	30.9±4.74	17.4±5.55	40.9±5.92	40.8±5.29
ときどき	30.2±5.06	15.6±5.20	40.0±6.18	39.1±5.31
ときたま	29.5±4.84	15.3±4.99	38.5±5.81	37.9±4.88
しない	29.1±4.96	14.7±5.39	37.7±6.43	36.6±5.35

Values are mean±SD

昭和63年度体力・運動能力調査報告書(文部省刊)より作成

ほとんど毎日；週3～4日以上の頻度で運動を実施

ときどき；週1～2回程度の頻度で運動を実施

ときたま；月1～2回程度の頻度で運動を実施

しない；ほとんど運動をしない

表-7 筑波大学男子大学院生の運動実施状況（推定）

	21～24歳	25～29歳
握力	「ときたま」	「ときどき」
体前屈	「しない」以下	「しない」以下
垂直跳	「ときたま」	「しない」

※本学大学院生のデータを表5に照合した場合の運動実施状況

表－8 筑波大学女子大学院生の運動実施状況（推定）

	21～24歳	25～29歳
握力	「ほとんど毎日」以上	「ほとんど毎日」以上
体前屈	「ときたま」	「しない」以下
垂直跳	「ときたま」	「しない」以下

※本学大学院生のデータを表6に照合した場合の運動実施状況

方、体前屈と垂直跳はどちらも「しない」者の値よりさらに低い水準にあった。

Ⅳ. 結 論

筑波大学大学院生の運動能力を三つの指標、すなわち第一に筋力を表す「握力」、第二に柔軟性を表す「体前屈」、第三に瞬発力を表す「垂直跳」の値で表し、それらの現状を把握した。まず、大学院生の平成2年度の体力測定値と文部省が毎年行っている運動能力テスト参加者、およびその内から特に取り出した「一般事務職員」の測定値と比較検討を行なった。この結果、女子大学院生の「握力」を除いて、大学院生の運動能力は総じて男女共に全国平均値を下回っており、ほとんど運動を「しない」者の水準に近いか、あるいはそれ以下であるという結果が得られた。

そして、この結果だけから判断すれば、体力、運動能力向上のために大学院生に運動を行わせるような働きかけが必要であると思われる。さらに、運動実践のための機会を、せめて週に1回程度—学部学生の一般（正課）体育のような形で—でも用意することが大学体育に対して要請される。ただ、それが実現される場合の留意すべき事として、本研究の結果から控えめに提言できるとすれば、筋力や瞬発力、柔軟性といった運動能力の低下スピードを緩め、運動能力のピークを少しでも遅らせるように配慮した教材、運動プログラムの開発が必要になる。もちろん、冒頭でも述べたとおり、その必要性は運動能力以外の

観点からも十分検討されるべきもので、そうした一連の基礎的研究が今後行われ、その結果から総合的に判断して何らかの策が施されるべきである。また同時に、体育プログラムの供給主体の諸資源からみたその可能性についても併せて十分検討されなくてはならない。

— 註 —

（註1）文部省発行の学校基本調査報告書（高等教育機関）では、最近5ヶ年間の大学数は460, 465, 474, 490, 499校と年々増加している。それに伴って、大学院の設置数も281, 287, 288, 294, 303校と同様に増加している。また、学生数の推移をみると、最近5ヶ年の学部学生数は1,848,698, 1,879,532, 1,931,483, 1,994,616, 2,066,962名、同様に大学院学生数は69,688, 74,271, 78,914, 82,476, 85,263名と年々増加傾向にある。

（註2）ここでいう「生涯スポーツ」が健康科学教育の対極にあるような考え方でないことは、すでに平成2年3月に開催された筑波大学体育センターフォーラムの報告書（刊行中）においても明らかである。

（註3）筑波大学では卒業条件として体育を4単位課している。

（註4）主要新聞4紙とは、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞をさす。

（註5）文部省の運動能力テストの結果は次にあげる職種毎の報告もみられる。その職種とは「農林漁業」、「労務」、「販売・サービス」、「保

安事務」,「管理事務」,「主婦・無職」,「その他」に分類されており,本稿で「一般事務職員」と呼ばれるのはこのうちの「管理事務」にあたるもので,保安事務との区別をする意図でそのような用語を使用した。また,管理事務は「研究者」,「大学院生」,「管理職」,「専門事務職員」,「一般事務職員」のデータで構成されている。本稿が管理事務を比較対象データに用いたのは「研究者」や「大学院生」を含んでいるという理由からである。

(註6) ここまでは一般事務職員のデータを比較の対象として用いてきたが,ここでは一般事務職員を含むテスト参加者全員の平均値を比較対象にする。これは,運動頻度の違いによる運動能力の値が職種別に記録されていない事情による。ただ,他の職種に比べた場合に,男女とも,さらに21~24歳群と25~29歳群両方の年齢層ともに,一般事務職員の運動能力は他の職業従事者を総合的に上回っている。従って,大学院生の運動能力がもしも全体平均値よりも少し低いということになれば,それは大学院生の運動能力は一般事務職員のそれよりもはるかに低いということになる。

(註7) 例外とは,21~24歳の女子の握力と体前屈での「ほとんど毎日」と「ときどき」の逆転を指す。

引用文献

- 1) 麻場一徳, 江田昌佑, 大木昭一郎, 寄金義紀: 筑波大学大学院生の運動生活に関する調査。大学体育研究. 8: 79-90, 1986.
- 2) 大学保健体育研究会編: 大学生の体育と保健。道和書院. 137-180, 1985.
- 3) 大学審議会編: 大学教育部会における審議の概要(その2) 一部会から総会への報告。大学審議会, 1990.
- 4) 保健体育理論研究会編: 健康と運動の科学。道和書院. 183-233, 1989.
- 5) 熊本水頼: 「大学一般教育としての保健体育科目を考える」。体育の科学. 38(12): 949-959, 1988.
- 6) 舛本直文: 大学体育目標として「身体経験」の指導事例: 1, サッカー・テニス。東京都立大学体育学研究. 15: 35-47, 1990.
- 7) 松浦義行: 体力の発達。朝倉書院. 68-159, 1982.
- 8) 宮村実晴, 矢部京之助編: 体力トレーニング。真興交易医書出版部. 271-274, 1986.
- 9) 全国大学体育連合体力テスト委員会編: 大学生の体力テストハンドブック。道和書院. 1988.

資料

- 昭和60年度体力・運動能力調査報告書: 文部省. 1986.
- 昭和61年度体力・運動能力調査報告書: 文部省. 1987.
- 昭和62年度体力・運動能力調査報告書: 文部省. 1988.
- 昭和63年度体力・運動能力調査報告書: 文部省. 1989.
- 平成元年度体力・運動能力調査報告書: 文部省. 1990.
- 昭和60年度筑波大学大学院生体力・運動能力測定値: 大学体育研究. 第8号: 127-129, 1986.
- 昭和61年度筑波大学大学院生体力・運動能力測定値: 大学体育研究. 第9号: 125-127, 1987.
- 昭和62年度筑波大学大学院生体力・運動能力測定値: 大学体育研究. 第10号: 107-109, 1988.
- 昭和63年度筑波大学大学院生体力・運動能力測定値: 大学体育研究. 第11号: 75-77, 1989.
- 平成元年度筑波大学大学院生体力・運動能力測定値: 大学体育研究. 第12号: 81-83, 1990.
- 平成元年度学校基本調査報告書(高等教育機関編): 文部省. 1990.